

# 科学記者は敵か？味方か？

Yukiko MOTOMURA **元村有希子** 毎日新聞科学環境部記者



例えばある日、記者から1本の電話が入ったとする。相手はあなたの研究について話を聞きたいという。会ったことのない記者である。

さてどうする。研究について話すのはやぶさかではないが、相手の本意はどこにあるのか。間違っただけを書かれたらどうしよう。

そのとき、とりあえず、その記者の所属部署を聞いてみる人もいるかもしれない。科学や技術、医療などの分野を専門に取材している科学記者なら、警戒心が和らぐだろうか。

## 研究者と科学記者の共通点

個人差はあるけれど、科学記者は他分野の専門記者より科学に関する知識を多く持つ。そして科学取材の勘どころや作法を経験から学んでいる。そして多くの場合、研究者と気が合う。

科学技術はおもしろいとか、なのになぜ社会から関心を持たれないのだろうかとか、科学の魅力が社会にもっとわかってもらいたい、と科学記者は思っている。その点、研究者と科学記者は共通している。

もっと本質的な共通点は「真実を追いかける職業」であることだと私は思う。科学者は、真理を追いかけて寝食を忘れることができる人種だ（これも個人差はある）。

記者も似たような使命感を持っている。取材対象について少しでも多くのことを知りたい、少しでも多くの事実を集め、真相に迫りたいと思っている。そのためには手間と時間を惜しまない。この部分に関しては、政治記者も事件記者も同じ行動規範で働いている。

一方、記者と研究者で異なるのは、行動する時間軸とアプローチする手法だろう。そこに関する違いを認めないと、両者の間に誤解が生じたり、期待して裏切られることになる。そして記者は煙たがられ、研究者は「世間知らず」とそっぽを向かれる。

しかし活発な研究者ほど、記者との付き合いを避け

て通れないのも事実だ。世間の人々は、科学技術に関するニュースを主にテレビと新聞から得ている（「科学技術と社会に関する世論調査」、04年）。記者が嫌いだからと、専門誌や自身のホームページにどれだけ書き込んでも、残念ながら社会への発信力はマスコミほどには期待できない。

## 違う時間軸、違う手法

研究者が何かを着想し、試行錯誤を重ねて論文にまとめ、それが査読を経て雑誌に掲載されるまでには、数ヵ月から数年の月日がかかるのが普通だ。

一方、記者は通常、1日～1週間単位で仕事をしている。極端なことを言えば、さっき起きた出来事について、15分後に迫る締め切りまでに原稿を書いて叩き込むよう鍛えられる。研究者のように「真相がわかるまで待つ」という理屈は通らない。

研究者は時々、その取材に付き合わされる。原発トラブルや自然災害、大事故などの場合、記者はその分野の研究者に電話をかけまくる。今、何が起きているのか、過去に似たようなケースがあったか、今後どんな影響があるのかなど、専門家の見立てや意見を聞いて紙面づくりに反映させるためである。

研究者の多くは「全容がわかるまでは答えられない」と言う。もっともだと思うが、記者は「わからないから聞いているのです」と食い下がる。失礼だとわかってはいるが、少しでも正しい情報を速く読者に届けるために欠かせない作業なのである。

ただ、意外なことに、科学記者は「失礼な記者」というイメージを持たれにくい。科学記者は事件記者とは違い、じっくりと予習し、礼儀正しく取材して、時間をかけて記事を書く職種だと思われているようなのだ。実際には、科学記者も一人の記者だから、場合によっては失礼な振る舞いもするし、勘違いや間違いも犯す。過信や過度の期待はお勧めしない。

## 科学記者は翻訳者であり監視者

米国で科学ジャーナリズムを志す人の教科書になっている「科学は正しく伝えられているか」(紀伊国屋書店)には、「作り話めいているが」と前置きした上で、研究者と科学記者の関係を表すこんなエピソードが紹介されている。

ピューリッツアー賞を受賞したニューヨーク・タイムズの科学記者、故ウィリアム・ローレンス氏に、ある研究者がこんなケチをつけた。

「君たち科学記者は、所詮われわれのテーブルのパンくずで食っているようなものじゃないか」

するとローレンス記者は「ごもっともですが、これでも結構大変なんです。残念ながらパンくずというのはたいていパサパサで新鮮じゃないですから」と返したという。

科学記者が科学の成果を知るタイミングは、業界では半ば「常識」になった時点のことが多く、いわゆるニュースとしてはもはや新鮮さを欠いている。しかも記者は当事者(研究者)にはなれないから、パンの真ん中のふわふわした部分ではなく「おこぼれ」をいただくしかない。

しかし、研究者とて、パンの「ふわふわ」をのんびりと味わっているだけでは生きていけない時代になっていることも事実である。

世論調査などからもうかがえるように、国民は科学技術の発展を歓迎しつつ、過度の進展には不安や不信を感じている。それを解消したり誤解を解くには、研究者から積極的に社会へ語りかける必要がある。もちろん、公的資金を使った研究の成果は社会に戻るのが当然だ。そのとき、社会との仲介役を果たすのが科学記者だ。言わば「翻訳者」の役割である。

一方で、科学記者はいつも忠実な翻訳者であるとは限らない。時には研究者に背を向け、彼らの独善をチェックする「監視者」の役割を演じる。論文不正や研究費不正、組織の不祥事といったルール違反があれば手厳しく批判もするだろう。

つまり科学記者は研究者と「是々非々」で向き合っ

ている。味方ではないが抵抗勢力でもない。緊張感のある友人関係、あるいは、対立することはあっても同じ方向を向いて歩く同志のような関係とでも言ったらいいだろうか。

## よりよい関係のために

「意義のある成果なのに扱いが地味」「丁寧に説明したのに誤解された」「悪いニュースばかり大きく書く」「集中豪雨のように報道し、熱が冷めたら忘れてしまう」

これらは研究者が科学記者に抱く代表的な不満だ。ノーベル賞は、日本人が選ばれるかどうかばかり注目され、外国人が受賞した場合や他の国際賞の扱いが小さすぎる。ダイオキシンや環境ホルモンなど、結果的に誤りだった報道に関しての対応が不十分だ…。

ごもっとも、ごもっとも。ただ、そこがマスコミの現時点での限界と見るべきだろう。

マスコミは交通事故から国連改革まで、社会のあらゆる出来事を扱う。だからニュースの大きさは相対的だ。もちろん記事が小さいからといって、研究の価値が低いわけではない。

記者は専門家ではないし、記事は論文ではない。記者は読者の目を引き、読んでもらえる工夫をする。正確さを損ねない範囲で細かい説明を省き、編集者は遊んだ見出しをつける。時には速報性を優先して“生煮え”の記事もある。良くも悪くもこうした「努力」は、科学に関心の薄い世間の人たちに向けたものであり、科学報道のありさまは、世間を映す鏡とも言える。

よい科学報道は、科学記者と研究者の健全な共同作業の上に初めて成り立つ。科学記者は努力を怠らず、研究者は限界を知って賢く付き合う。根気のいる作業だが、やらないことには、よりよい将来もないのである。

©2007 The Chemical Society of Japan

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員の執筆によるもので、文責は、基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として認め掲載するものです。ご意見、ご感想を下記へお寄せ下さい。  
論説委員会 E-mail: ronsetsu@chemistry.or.jp